

大原家と公益財団法人有隣会の活動について

大原 あかね

公益財団法人有隣会理事

I はじめに

公益財団法人有隣会は、岡山県倉敷市に2015（平成27）年に設立された。当初は一般財団法人であったが、その後公益法人となった。この法人は、大原家代々の事業経営と社会貢献の志を現代に活かすことにより、産業、学術及び文化の振興および発展に寄与することを目的として設立された。そもそも、倉敷の大原家とはどのような家で、特に7代目大原孫三郎の事例をもとに、大原家の企業家としての社会連携活動と、その意思をついだ有隣会の活動を紹介したい。

倉敷は江戸時代より、天領として栄えていた。その倉敷に元禄期に児島郡片岡村から移住したのが、初代忠右衛門忠則である。それから、倉敷で活動をし、5代目与兵衛清久の時に、庄屋などを務めるようになる。そして6代大原孝四郎の時代に倉敷紡績を創業し、その息子が7代大原孫三郎（写真1）である。孫三郎は「事業に冒険はつきもの。儂の眼には十年先が見える」といい、数々の事業を行った。

孫三郎は1896（明治29）年に東京専門学校に入学。1904年に家督を相続、1906年に倉敷紡績2代目社長に就任、1909年に倉敷電灯（現、中国電力）を設立した。1926（大正15）年には倉敷絹織（現、クラレ）を設立、1930（昭和5）年には中国銀行を設立して、頭取に就任している。これらの事業の傍ら、1914（大正3）年に岡山孤児院院長に就任、1914年に大原奨農会農業研究所、1923年に倉紡中央病院（現、倉敷中央病院）開院、1930年に大原美術館を開館と、社会事業にも取り組んでいる。孫三郎がどうしてこれらの二足の草鞋をはくようになったのか、詳しく見ていこう。

II 大原孫三郎の社会貢献

孫三郎は、その事業活動において、倉敷紡績社長就任、倉敷絹織設立、倉敷電灯設立、中国銀



写真 1 大原孫三郎

行設立と多くの企業を興しているが、これらの取り組みはすべて、倉敷紡績の事業拡大に向けた取り組みであった。そういう意味では首尾一貫した思想を持っていたといえよう。

その一方で、社会事業家としての孫三郎はどのようなのであろうか。詳細に見てみよう。

孫三郎が社会事業に関わるようになったのは、岡山県で日本初の孤児院を創設して「児童福祉の父」とも呼ばれている石井十次との出会いがきっかけであった。実は、孫三郎は東京専門学校に在学中に放蕩生活を送り、その結果、学業途中で倉敷に連れ戻された。その後しばらく、人生に迷う時間を過ごしていた。そのような孫三郎を心配した友人が引き合わせたのが石井十次であった。石井の児童福祉への姿勢に孫三郎は胸をうたれ、自身の進むべき道の一つが社会福祉だと考えるに至ったのである。

もともと孫三郎は、東京専門学校在学中も社会問題にも関心を持ち、足尾銅山へ友人と見学へ行ったりしていたが、持続可能な社会の実現のためには、ただ資産を投じるだけでなく社会問題を根本的に研究し解決することが必要と考えていた。そこで彼は研究所を設立する。

最初に設立したのは1914年の大原奨農会農業研究所である。農業従事者の福祉向上のための農業改革を目指し、新品種や栽培法を生み出す礎を築いた。現在の岡山の特産品となっている果物の品種改良などもこの研究所が行った。その後、この研究所は岡山大学の所管となり、現在は岡山大学資源植物科学研究所として存続している。

次に設立されたのが、1919年に設立された大原社会問題研究所である。米騒動など社会問題が深刻化する中、日本で最初の社会問題に関する専門研究機関として設立された。この研究所は設立以来、様々な困難にあったが、現在は法政大学の大原社会問題研究所となり、研究活動を活発に続けている。

この社会問題研究所から1921年に生まれたのが、倉敷労働科学研究所である。深夜労働や過酷な作業環境などの工場内の職場環境の改善をはかるために設立された。当時、紡績業の女性工員の労働条件は劣悪だった。そのため、過労から健康悪化などの問題が多発していた。そのような時代に、当時倉敷紡績社長だった孫三郎が、将来労働科学研究所所長に就任する暁峻義等と深夜の工場の視察に出かけ、そこで劣悪な労働環境を目の当たりにし、その改善を2人で誓ったという逸話はあまりに有名である。そして、労働条件と職場環境が及ぼす影響を解明し、健全な企業経営確立のための改善策を検討するため、労働科学研究所を設立した。この研究所は現在も公益財団法人大原記念労働科学研究所として存続している。

これら、100年ほど前に設立された民間の研究所がそれぞれ現在も存続しているということは驚くべきことであるが、実は、これらの研究所にはもう一つ特色がある。それが貴重書を所蔵しているということである。

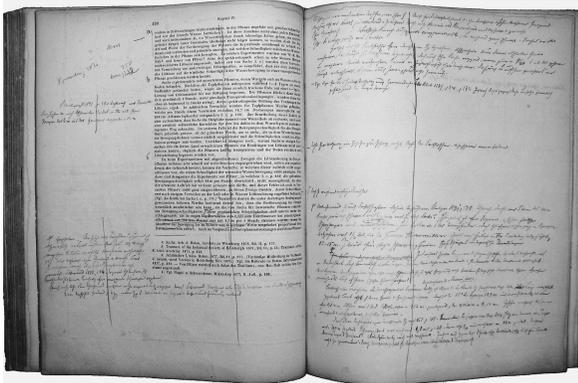


写真 2
 ヴィルヘルム・ペッファーの手稿本
 (資料) 岡山大学附属図書館所蔵。

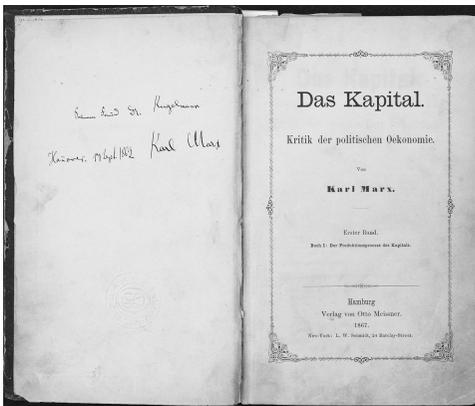


写真 3
 カール・マルクス『資本論』初版本
 (資料) 法政大学大原社会問題研究所所蔵。

孫三郎は「余の使命は教育にあり」という言葉も残している。それほどに、教育にかける思いはひとときわ強かった。孫三郎自身は海外へ行ったことはほとんどなかったのだが、多くの研究者を海外に派遣していた。例えば、農業研究所の山口弥輔をドイツに、社会問題研究所では榎田民蔵をドイツに、久留間鮫造をイギリス・ドイツに、大内兵衛をドイツ・イギリスに、森戸辰男をドイツに、労働科学研究所の暉峻義等をドイツ・フランス・イギリス・アメリカに、ほかに中央病院の早野常雄をアメリカ・オーストリアなどへ、画家の兄島虎次郎をフランス・ベルギー・ドイツなどへと、1919年から数年にわたり、ちょうど第一次世界大戦の混乱期のヨーロッパへ留学させている。そして、孫三郎の奨学金で留学をしていた研究者たちが、ちょうど売買に出されていた、ヨーロッパの大学が所蔵していた古典文庫などの購入を孫三郎に提案したのである。そして購入された古典文庫は貴重書として各研究所で大切に保管されてきた。最先端の研究所だけでなく、古典書の価値を孫三郎も理解していたのである。そして購入されたのが、例えば農業研究所に所蔵されているヴィルヘルム・ペッファーの手稿本（『Pflanzenphysiologie』）、社会問題研究所にあるカール・マルクス『資本論』の初版本、労働科学研究所にある温知堂文庫の中の『解体新書』などである。

そのほかにも、孫三郎の教育に関わる事績はある。例えば、倉敷紡績内に尋常小学校を設立し



写真 4
訓話を行う大原孫三郎
(資料) クラボウ提供。

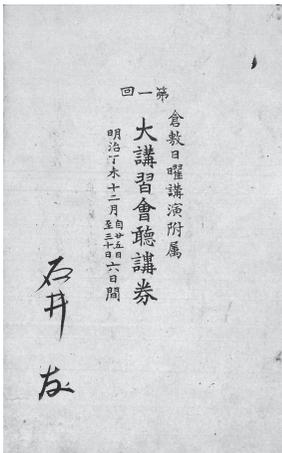


写真 5 第 1 回大講習會聴講券

た。また、夜学として、私立倉敷商業補習学校を設立し校長に就任、自ら教壇に立ったり、倉紡工手学校を設立して紡績技術の向上を図った。

さらに、孫三郎は工場視察の際などに多くの訓示・訓話を行い、それらの一部は、社内報「倉敷時報」に掲載された。写真 4 の中央壇上の人物が大原孫三郎で、その左には、グランドピアノがある。ピアノは、情操教育として唱歌を教える目的で購入された。分散式寄宿舎は、それまでの大部屋から少人数での生活を可能にしたのみではなく、裁縫室や花壇が設けられ、学校設置が計画されるなど、女性従業員のための充実した福利厚生施設である。このことから、孫三郎の教育にかける姿勢と、労働環境の改善への強い思いが伝わるのではないだろうか。

社会教育としては、1902 (明治 35) 年より倉敷日曜講演を開催し、当時一流の知識人・政治家・研究者などを倉敷に招き、広く市民が聴講した。第 60 回の記念講演は、総理大臣経験者で早稲田大学総長の大隈重信を迎えて盛大に催され、通常数百名程度の聴衆である倉敷日曜講演に五千人も七千人とも言われる市民が殺到した。倉敷日曜講演に附属して催された大講習会は申込制であり、聴講券 (写真 5) が配布された。写真 5 に示したのは、「石井友」(石井十次長女で後の児島虎次郎夫人) と記名された聴講券で、このとき友さんは、17 歳であった。このような若い女性が聴講することができたということが、倉敷の教育レベルの高さを示しているのではないか。そして、このような若い女性が参加できるように孫三郎が配慮していたということがうかがわれる。

さらに、孫三郎の社会事業として取り上げられるべきは、倉敷中央病院の設立であろう。1923 年倉紡中央病院が開院した。名が示すとおり、当初は倉敷紡績社員とその家族のための病院 (工



写真 6
倉敷中央病院の館内温室
(資料) クラボウ提供。

場内医局の拡充)を目的としていたが、開院時には、広く市民に開かれた病院として開院した。東洋一の理想的な病院，病院くさくない病院，患者のための治療，平等主義を理念としている。開院直前まで欧米へ留学していた辻緑院長等の医師により購入された最新の医療設備による治療が行われ，患者の娯楽を目的とした館内温室（児島虎次郎デザイン）もあった（写真6）。倉敷中央病院の効用として孫三郎は、「私が中央病院を造ったがために年々倉紡は損失だけするやうに見えるが，それは廻り廻って倉敷の経済に利益をもたらし，倉敷の資本経済への好影響は更に倉紡に対して増大して帰って来ると思ふ」（『大原孫三郎伝』161頁）と言っている。

もう一つ，孫三郎の教育の視点が活かされた事例が「倉敷さつき會」ではないだろうか。これは，1920（大正9）年，倉敷紡績社長大原孫三郎夫人壽恵子を会長として設立された修養教化団体である。倉敷さつき會は倉敷紡績社員の夫人を中心に会員79名で発足した。設立目的は，会員各自の向上と親睦，社会奉仕を行うことだった。倉敷さつき會では，新年互礼会，年1回の総会，臨時の講演会・講習会を開催した。これらの会は，近隣小学校などを会場にする場合もあったが，大原家向邸（現，新溪園）でも頻繁に行われた。講演会・講習会は1920年7月の発会記念講演会を皮切りに，年10回程度開催された。講演会では，婦人問題・児童問題を中心に取り上げられている。主な登壇者は，例えば，倉敷紡績社長であった大原孫三郎自身が話をするということもあったが，後の倉敷中央病院院長辻緑，洋画家児島虎次郎，倉敷町長原澄治，大原農業研究所所長近藤萬太郎，大原社会問題研究所森戸辰男と，大原孫三郎の関わる人物が登壇をしている。もちろん，女性たちが「学ぶ」姿勢があつて初めて実現することではあるが，この学びの後ろに，孫三郎を始めとする当時の男性たちが積極的に関わっていたのは間違いない。

そのほかにも，講習会・講演会の一環として，1922年10月には，大原奨農会と第一合同銀行の見学会が催された。奨農会では，農業の研究室や農園を見学し，銀行では建物内部の見学に加え，日銀から取り寄せられた貨幣各種を縦覧した。当時の女性たちにとっては，貴重な体験をしていたのではないだろうか。そして，学びの機会を得た女性たちに何が起こったかと言うと，社会



写真 7
若竹の園

(資料) クラボウ提供。

課題に目が向くようになったのだ。壽恵子はこのように書き記している。

「この頃お働きになるお母さんが増えお子さんたちが多数広場で遊んでおられます。唯遊ぶならよろしいが悪いことをしてはいけません。何か私達でできることはないでしょうか。」

そうして、社会課題に向き合った彼女たちが出した結論が保育園の設立だった。保育園の設立を決めた後も、倉敷さつき會の女性たちは、大阪へ見学会へ行ったり買い出しに行ったりしている。これらの後ろにも男性たちの理解があったに違いない。また、保育園設立には資金が必要になってくる。そこで、さつき會はバザーを開催する。このバザーには大原家などから様々な品が提供されたとも言われている。そして、保育園「若竹の園」が開園する(写真7)。この保育園の活動は大原グループが総力を挙げて子育てに関わったともいえるような状況だった。例えば、大原孫三郎が創設した3つの科学研究所の一つ、倉敷労働科学研究所の研究成果が若竹の園の保育において活用された。若竹の園の園児たちの精神発育状況などの調査を担い、この精神発育状況調査で用いられた検査法は、労研研究員の桐原葆見が改良したものであった。1923年設立の倉敷中央病院の医師たちも若竹の園の園児たちの健康管理に貢献した。当時の園児たちには疾病が多かったため、倉敷中央病院から小児科・眼科の医師が嘱託医として派遣され、園児の健康維持を行った。今でこそこのような取り組みが保育園で行われるのは当たり前になってきているが、100年前に行われていたというのは顕著なのではないだろうか。まさに、企業家大原孫三郎の社会連携活動であり、教育への思いの表れでもある。

Ⅲ 有隣会の活動

このように、大原孫三郎の社会連携活動について述べてきたが、この意思を継いで活動しているのが公益財団法人有隣会である。そこで、現在有隣会が行っている活動についてお伝えしたい。

まず、孫三郎が行っていた「倉敷日曜講演」を現在に引き継ぐのが「大原孫三郎・總一郎記念講演会」である。總一郎は孫三郎の息子だが、孫三郎亡き後は總一郎が倉敷日曜講演を引き継いでいた。そして、總一郎が亡くなった後に引き継いだのが有隣会である。現在も年に1回、孫三郎の誕生日、總一郎の命日が7月末なので、その時期に市民に無料で開放された講演会を開催している。

また、孫三郎・總一郎父子の研究会も開催している。これは、コロナでしばらく中断しているが、大原家にかかわる研究は多分野にわたる研究となり、非常に貴重な機会ともなるため、今後続けて開催する予定にしている。

もう一つの公益財団法人有隣会の業務が「語らい座大原本邸」の運営である。大原家の本邸を5年前から一般に公開し、この運営を有隣会が行っている。この施設は、大原家がなしたことを一般に伝えることはもちろんだが、それだけにとどまらず、孫三郎の「教育」の理念を現在に活かすことを目的とし、教育プログラムを実行している。例えば、若手企業家が先輩企業家の体験談を聞き交流をする機会の創出、科学分野とアート分野の研究者の交流会、そして、くらしき未来K塾という、教育を切り口に教育関係者と企業人の勉強会、そして、くらしき町家留学である。

くらしき町家留学とは、留学を本来日常の空間を超えた場所で文化や歴史を学ぶことととらえ、二百数十年かけて日常の時間を超えた大原本邸を拠点に、「倉敷」を歩き「自分」について考え「未来」に出会う機会を若者に提供することを目的としている。もちろん、これは学生のみならず、企業の研修にも利用をされている。学生の場合は宿泊プログラム、企業研修の場合は企業の事情に応じた時間で、孫三郎の企業家としての思想と社会事業、それらが機関の見学など多様なプログラムで構成されて、現在も続いている。

IV 大原美術館の活動

実は、公益財団法人有隣会だけでなく、大原孫三郎の社会連携活動を現在も行っている法人が倉敷にはある。それが、公益財団法人大原美術館である。ここからは、大原美術館の社会連携活動を報告することで、孫三郎の社会連携活動が現在にどう生きているかをお伝えしたい。

大原美術館は、周知のとおり、画家児島虎次郎が大原孫三郎の資金援助を得て留学先の欧州で収集した西洋近代美術作品がコレクションのスタートとなっており、その後、収集作品の幅が広がり、現在は総合美術館として来館者を迎えている。第二次世界大戦中も来館者を受け入れていた実績もあり、その後、平和な時代となった後も、大原美術館は様々な人々となつながら、活動を進めてきた。例えば、西日本豪雨災害の際も、倉敷地方で警報が解除された後はすぐに開館をして、来館者を迎えている。

例えば、未就学児童のためのプログラムは大原美術館の特色の一つであろう。30年以上も前に、先述の若竹の園保育園の園児を受け入れたところから始まり、コロナ前は延べにして年間3,000人以上の未就学児童を受け入れていた。美術館に来たことがない5歳児も多いが、職員たちと美

術館での過ごし方のお約束をしたのちは、絵画の前でおしゃべりをしたり、お絵かきをしたり、パズル遊びをしたり、それぞれの園児にとって美術館体験が豊かなものになるように、美術館のスタッフと保育士たちが協働してこの場をつくりあげている。

また、地域の小学校に閉館日に無料で美術館を開放し先生たちが自分のクラスの生徒に授業をする、というプログラムもある。通常は、大原美術館が準備したプログラムを来館者に提供するのだが、このプログラムの場合、小学校の先生がクラスの生徒たちとどのような授業を行うのが良いかを考えて、自ら授業を組み立てるところが特色だ。先生によっては、国語の授業をしたり、社会の授業をしたり、なかには体を動かす授業をする先生もいる。美術館で授業というだけでも図工を思い浮かべてしまうが、それだけでない多様な学びの場が提供されるこのプログラムは、孫三郎の「教育」の理念を継承しているとも言えるのではないだろうか。

もちろん、最近はオンラインを使用したプログラムも行っている。

ただ、社会連携活動というのは、教育の場の提供だけではない。例えば、地域の電車で大原美術館の絵画でラッピングする、ということもしている。これは、西日本豪雨災害で被災した被災地を走る電車で、被災者を応援したいという鉄道会社とのコラボレーションで実現した。

ほかにも、未就園の子たちを対象にしたテーマパークに大原こども美術館を設置した、というのも社会連携活動であろう。これは、おもちゃを扱っている企業との連携のなかで生まれた活動だ。

もちろん、地元自治体との連携も進めている。例えば、G7 倉敷教育大臣会合等のレセプション会場として美術館を開放することもある。また、多くの協賛企業のご支援をいただきながら、それぞれの企業活動にどのように美術館が資することができるかを、日々協賛企業の方々とともに模索しながら、様々なイベントを実施し、コラボレーションをした商品の開発なども実施している。

これからも、公益財団法人有隣会も公益財団法人大原美術館も、大原孫三郎の意思を引き継ぎ、社会連携活動を行っていきたいと思っている。